

鏡の裏側

森本紗加

張り詰めた世界に立つわたし。剣を持って相手に立ち向かう姿は、世界を救う勇者そのもの。真っ白い服を着て、左手にはグローブをはめて、でっかいマスクを頭にかぶって……ここはどこだっけ。

つん裂くような機械音の中から、微かに聞こえてくる心地の良い声が自分の名前を呼んでいる気がする。そうか自分は英雄なのか。

冷たい鉄の網目を通して見える世界はやけに鮮明で、目の前にいる敵をどうやって倒そうか、ただそれだけを考える。

「よし心臓を突こう」

低速で進む世界が、そう決めた途端急速に動き出す。前に一步踏み出して、自分を加速させる。心臓を狙っていることを悟られないように、まるで相手の右肩を狙うように剣を前に突き出して、相手が剣でそれを払いのけようとした瞬間、今だ！ 素早く心臓へ剣を突き立てる。

一瞬の静寂、それから、それから。

「はい、カット！」

頭の中に鳴り響く鐘の音。あ、夢か。そう考えたのも束の間、顔にしっとりした感触と、いつもより五グラム重い自分の心臓。

今日も拳を握りしめて、フェンシングをする。